

「私」、「あなた」から見えるベトナム文化
-人称代名詞が語ること、村上春樹『ドライブマイカー』を通じて-

グローバルD & I 推進室 准教授
勝又 美穂子

ベトナムに来たばかりのころ、張り切ってベトナム語を学んだ。家庭教師の先生について週2回学ぶうちに、難しいと言われる発音も案外うまく身に着き、よく知った仲である先生とは簡単なやり取りができるようになった。

しかし、町に出ると事情はかなり異なった。まずレストランでウェイター、ウェイトレスを呼べないのだ。当時まだ比較的若かった自分と、呼びかけたいウェイトレス、どちらの年齢が上なのか、下なのか・・・自分が年下だとほぼ確信した場合でも、今度はお客である自分と店員である相手との立場の差が頭を悩ませる・・・「あなた～」と言呼びかけるだけなのに、どの人称代名詞（「あなた」）を使えば正しいのかが分からず、声にならないのである。それから何年も経ち、今は確実に自分がウェイトレスやウェイターよりも年上と言える年齢になり、レストランやカフェでの呼びかけがなんと気楽になったことか。

日本語にも「あなた」「おまえ」「きみ」「あんた」「私」「おれ」「わし」「ぼく」「彼」「やつ」等使い分けられる人称代名詞は多々存在する。しかしベトナム語の比ではない。ベトナム語では自分と相手との年齢差、関係性等により、使う人称代名詞が目まぐるしく変わるのである。一般的な話の場合、この程度の年齢の人にはこの人称代名詞を使う、という共通した認識はあるものの、自分と相手との直接的なコミュニケーションになると、その間での年齢差や家族間の関係性、職場の役職等等、相手との複雑な関係要素・背景により人称代名詞が決まって来るのである。人称代名詞が自分と他者の関係性も強く示す以上、ベトナム語ではそれを適確に表現することが非常に大切であり、丁寧に話す場合には、文頭に置いたり、文末においたり、はたまた繰り返したり、と頻出する。ここを押さえなければ、本当の意味でベトナム人の輪の中に入れてもらうのは難しいと常に感じている。

そのため、ベトナムの人は初対面でも「何年生まれですか?」「干支は何ですか?」「結婚していますか?」などの質問で相手と自分の距離を測るのがマナーである。日本の感覚で捉えると少々ギョっとする質問ばかりだ。そんなこんなで、ベトナムには慣れてきたつもりでいても、この人称代名詞の厄介さにはいつまでも悩まされているのである。

機会があり、本学人文学研究科外国学専攻、清水政明教授の授業で、村上春樹の「ドライブマイカー」を日本語（原文）とベトナム語訳とで比較しながら読み進めたことがある。この小説は、諸事情によりしばらく運転が出来なくなった主人公の俳優が、代行サービスで来てもらった女性運転手の運転する自身の愛車で通勤しながら互いの過去をボツボ

ツ話す、というストーリーである。原文で「家福」(苗字)や「彼」と呼ばれる主人公は、最初はつかみどころのない像であったが、運転手との会話で使われる言葉、語られる経験や表現される思いから少しずつ読み手の中でその影がはっきりし、最終的に明確な一人の男性として印象付けられる流れになっている。他方、ベトナム語訳ではどうか。ベトナム語でも主人公は「Kafuku」と呼ばれているが、ストーリーが始まってすぐに「Kafuku」を指す「彼」の単語として聞きなれない人称代名詞が登場する。私のようにベトナム語を日常のサバイバルで使うことで精一杯な人間にとってはこの人称代名詞は聞いたことすらなく、原文との読み合わせでかろうじて気づいた程度だ。

しかし、一緒に読んだベトナム人の学生はこのベトナム語の「彼」の人称代名詞から、主人公について「少し年齢が高い男性で、見た目はちょっと疲れていて、家族に悲しいことがあったような感じです」とまで予言した。ベトナム語における人称代名詞が持つ意味や与える印象の強さに驚かずにはいらなかった。ベトナム人にとって人称代名詞一言が伝える社会的意味合い、関係性の明示、相手への思いはノンネイティブには計り知れない重要な意味を持つことを思い知った瞬間であった。高齢者を敬い、上の役職の者への礼を守り、恩返しを忘れない、ベトナムの人に見られるこれらの精神と行為について腑に落ちた気がした。ベトナムも儒教文化圏であるが、それ以上に「言語」を通してより明確に構築された人間関係においては自然と、他者に対する自分の位置づけと、その関係における自身の身の処し方も併せて明確化されるのであろう。そうした行いが重なって構築されているのがベトナムの文化であり社会であることを、改めて認識したのである。と同時に、ベトナムの社会では、曖昧な人物像や、曖昧な関係性というのはあまり許容されないのかもしれない、と想像し少し緊張も感じた。人称代名詞を使いこなす自信は益々減退したのが正直なところである。

「ドライブマイカー」の醍醐味の一つは、徐々に明らかになる主人公の経験を通し、読み手によって作り出される多様な主人公像が存在し得ることだと思う。一方、ベトナム語訳の場合おわかりいただいたように、主人公像は早い段階で予言されてしまうのである。初対面から人称代名詞を確定することが重要なベトナム文化では、モヤモヤとした影のような人物像を追いかけてながらストーリーを読み進めるのでは、物語に登場する他の人物と主人公との関係性まで理解し難くなってしまうのだろうと自分なりに納得した。

とはいえ、ベトナムでも村上春樹氏の小説は大人気である。曖昧で、つかみどころの無い世界観の中からどこか自身と重なる部分を感じさせられる村上小説の魅力は、だからこそ、世界中の言語が持つ意味、背景、文化の中で自在に変幻でき、尚もその魅力を減らすことなく読み手の心に響いているのだろう。そちらも併せて腑に落ちたのであった。